

01-020

養護教育専攻大学生を対象とした漢方薬 に対する意識調査： 特に漢方薬教育に関するニーズ調査

岡田 忠雄、山田 玲子

北海道教育大学 教育学部 札幌校 養護教育専攻 医科学看護学分野

【背景】

養護教諭は、学校児童の養護をつかさどり（昭和22年、学校教育法）、学校におけるすべての教育活動を通して、ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育と健康管理によって、子どもの発育・発達の支援を行う特別な免許を持つ教育職員である（平成15年、日本養護教諭教育学会）。養護教諭の役割としては、1）救急処置、健康診断、疾病予防等の保健管理、2）保健教育、3）健康相談活動、4）保健室経営、5）保健組織活動等役割、と多岐にわたる保健活動を日々行っている。学習指導要領の改定により、中学校で「くすり教育」が2012年度から完全義務化（高等学校でも2013年度から全面实施）され、中学校で実施される「くすり教育」は、医薬品の正しい服薬方法や、薬の副作用に関する内容が教育されている。一部の漢方薬は、市販薬（OTC）として薬局で購入することが可能であり、養護教育専攻大学生は、子どもの漢方薬の一般知識や留意点も理解しておく必要がある。

【目的】

今回、養護教育専攻大学生の漢方薬意識調査を行い、その現状と問題点、また漢方薬教育に関するニーズを調べた。

【対象と方法】

78名（女77名、男1名；1年次41名、3年次37名）に評定法（無記名、複数質問回答形式）アンケート調査を行い、漢方薬意識度33項目を調査した。

【結果】

現在の医療に漢方薬は必要かへの肯定的返答が66.2%、漢方医学の考え方を理解しているは肯定的返答が76.6%、漢方薬は西洋医学と異なった良さがあるは肯定的返答が98.7%、漢方薬は子どもに使用可能であるでは肯定的返答が70.1%、漢方薬における未病の概念を知っているでは肯定的返答が89.6%、漢方薬をもっと治療に取り入れて欲しいは肯定的返答が68.8%等であった。

【結語】

養護教育専攻大学生は漢方薬一般の認知度は比較的高く、更なる能力向上を目指して、漢方薬教育を行うことも選択肢であると考えられた。

01-021

平成27年度から新たに始めた岡崎市・ 幸田町の保育園・幼稚園児の腎臓病・糖尿病 検診システム

鈴木 研史^{1,2}、新家 雪彦^{3,4}¹岡崎市医師会理事、²亀美ヶ丘小児科、³岡崎市医師会、⁴にいのみ小児科

【はじめに】

岡崎市・幸田町では、小中学校の学童腎臓病・糖尿病検診の包括的な管理を行っている。しかし、幼稚園・保育園児の検診に関してはこれまでは検査実施後、各園に結果を報告するのみであった。小児腎臓病学会から3歳児検尿フローチャートが提示されたことも契機に、平成27年度から岡崎市・幸田町の保育園・幼稚園児を対象とした腎臓病・糖尿病検診システムを新たに構築したので報告する。

【対象】

岡崎市と岡崎市幸田町の幼稚園、保育園の園児14,901名を対象とし、受検者数は14,606名で受検率は98.0%だった。

【検査方法】

3歳児は3歳児検尿フローチャート、それ以外の児は小中学校の実施要項をもとに保育園・幼稚園児の実施要項を新たに作成した。1次検査は試験紙法にて行い、岡崎市医師会公衆衛生センターにて受検の場合、蛋白（±）は確認試験であるスルホサリチル酸法を実施する。2次検査は協力医療機関で試験紙法を行い、3次検査は問診、血液検査、尿検査等を行い医師の診断で4次検査へと進む。協力医療機関は、岡崎市・幸田町内の小児科専門医がいる医療機関、4次検査は主に岡崎市民病院等で行う。

【検診体制】

1次検査が園でできなかった児は、3歳児は3歳児健診の健診会場で、3歳以外の児は協力医療機関で検査を実施した。2次検査以降の結果及び報告は、岡崎市医師会公衆衛生センターで集められ報告書を作成し岡崎市保育課、幸田町こども課を通して各園へ送られる。

【結果】

実施した14,535名のうち蛋白陽性者は251名で全体の1.72%。そのうち蛋白（±）の175名にはスルホサリチル酸法による確認試験を実施し、最終的な蛋白陽性者は117名で0.80%という結果となった。尿糖陽性者は5名で0.03%、尿潜血陽性者は213名で1.47%だった。11月までの報告で4次検査を受けた児は21名で、治療を必要とする疾患がみつかった児は3名で、ネフローゼ症候群、無症候性血尿、溶血性尿毒症症候群後だった。

【考察】

今回の検診システムをつくる過程で、公私立保育園・公立幼稚園と私立幼稚園との間に児の健康管理業務について違いがあることが分かり、今回の検診システムへの参加をきっかけに新たに保健や健康管理に関して継続的な私立幼稚園との連携をつくることができ、高い検診率も得ることができた。